

## 「神殿崩壊の予告」

2014年11月05日

マルコによる福音書13章1節～2節。イエスが神殿の境内を出て行かれるとき、弟子の一人が言った。「先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。」イエスは言われた。「これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。」

主イエスは、エルサレム神殿当局が殺意に燃えていることを知りつつも、エルサレム入城から毎日、ベタニヤから弟子たちを連れて、公然と神殿に來られた。神殿当局は論争に破れ、民衆に支持される主イエスに歯ぎしりしながら、遠巻きに監視していた。緊張感に溢れる日々であった。夕方、境内を出て行く時、一人の弟子が「先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう」と感嘆の声をあげた。

エルサレム神殿は、ローマ皇帝に取り入ってユダヤの王となったヘロデ大王が建てた大神殿であった。彼が建てた建造物の中で最高のものであった。紀元前20年頃から建て始められ、主イエスの時代になっても、まだ完成していなかった。広さは約30エーカーで、それぞれの側が333m、433mの城壁で囲まれていた。数10トンから数百トンの石が持ち込まれ、建築を誇ったローマ人にも一度はエルサレム神殿を見たいと思わせたほどの壮大な神殿であった。世界の不思議の一つに数えられている。ユダヤ人にとっては、ソロモンが建てた神殿の再建で、信仰の寄りどころであり、魂の故郷であった。また、ローマの屈辱的な支配に対し「これを見よ」と誇りを持って胸を張れるものでもあった。

ガリラヤから来た弟子たちは神殿の荘厳さに魅せられ、彼らの「なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう」という感嘆の声は当然であろう。ところが、主イエスは「これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない」と、いとも簡単に神殿の崩壊を予告された。歴史的事実は予告通り、紀元70年にローマ軍に包囲され、神殿は無残に崩壊し、立てこもった人々は悲惨な死を遂げ、エルサレムの町は壊滅した。

宗教団体が巨大な教団を形成すると、必ず荘厳な神殿、伽藍、仏閣を建て、権威と権力を見せつけようとする。建造物としては、見ごたえがある。エルサレム神殿は「嘆きの壁」しか残っていない。その壁の前で熱心に祈るユダヤ人の姿が思い起こされる。エルサレム神殿が残っていれば、全体像を見たかと思う。模型は作られているが、迫力はない。日本の神社、仏閣も見事な美しさがあり、建築技術の高さに敬服する。

ヨーロッパに行くと、大教会（聖堂）が建っている。その時代の信仰者たちが力と思いを尽くして建てたのであろう。権威、権力を見せつける大教会において、キリスト教宣教が可能になり、そしてキリスト教の文化、芸術が生まれ、伝承されていったとも言えよう。しかし、キリスト教が衰退している今日、大教会が観光資源やミュージアムになり、高い天井を利用してサーカス小屋になっているのを見聞きする。歴史的建造物として大事に保管してほしいと思うが、これ見よがしの大教会は主イエスが示した信仰から見ると、違うのではないかと思わされる。主イエスは個々人の生を、殊に弱い者にさせられている人々を具体的に愛された。現在、「原理主義」ではなく、聖書の記述に基づく主イエスの愛と真実に倣おうとする、私の言葉で言えば、「原点主義」への回帰が求道、模索されている。神殿崩壊は自明の理で、共に生きる「愛」こそがキリスト教信仰の神髄であろう。